



図 1. ウロコミズゴケの polysety. \times 約 3.5.

細胞は $18 \times 17 \mu$ であった。Longton (1962) は *Atrichum nndulatum* の polysety の解析の結果、polysety の場合の胞子の大きさは monosety の場合とほとんど有意な差がなく、蒴の大きさならびに蒴内の胞子の数に差があることを報告している。今回のウロコミズゴケの場合は、試料が少なく、十分な解析はできないが、上記のように蒴の大きさは明らかに monosety の場合より小形になるが、胞子の大きさはほとんど同じで Longton (1962) の述べている傾向とよく似ている。

本報をまとめるにあたり、御指導賜った井上浩博士に感謝する。

The polysetous sporophyte (two sporophytes on a pseudo-

podium) was newly found in *Sphagnum squarrosum*. The capsule of monosetous sporophyte of this species was about 2 mm in diam. but those of polysetous sporophytes were 1.7 mm and 1.2 mm in diam. respectively. There was found no significant difference of spore-size between the spores of monosetous and polysetous capsules, and the spores were about 18μ in diam. in both cases. 引文献 Gyorffy, I. (1931): *Sphagnum*-Monstruositäten aus der Hohen-Tatra. Rev. Bryol. Lichenol. 4: 189-193. Lyon, H.L. (1905): Polyembryony in *Sphagnum*. Bot. Gaz. 39: 365-366. Longton, R.E. (1962): Polysety in the British Bryophyta. Trans. British Bryol. Soc. 4(2): 326-333.

(米沢東高等学校生物研)

○“杉本順一「植物界」の有効出版性について”に関する意見 (田村道夫*・堀田 満**・河野昭一***) Michio TAMURA, Mitsuru HOTTA, Shoichi KAWANO: An opinion for “Was Sugimoto’s the Nippon Journal of Botany published effectively?”.

本誌55巻3号(昭和55年3月)に、本田正次博士ほか6氏によって杉本順一氏の「植

物界」の出版を無効とする見解が発表された。最近、命名法についての関心が高まってきたのはよろこばしいことではあるが、新学名が発表された出版物の有効性についての見解を公表することは、場合によってはいろいろな問題をひきおこす可能性があるので慎重にする必要がある。

すでにその「見解」のなかでのべられているように、問題の出版物は日本、外国をとわず、主要な著作に引用されたこともないし、主要な研究機関にも見られないということである。我々もそれについてのうわさは聞いたことはあるが、具体的な内容を知る機会はなかった。もちろんその内容を知っておられた人も少なくともなかっただろうと思うが、その人達は今までその出版物を無視するという、極めて常識ある対応をとってこられたのである。したがって、その出版物によって日本の植物の学名が混乱したというようなことはなかったのではないだろうか。ところが、それが出版されて50年余りもたった現在、その存在を何故に無効と公示されたのかは理解に苦しむところである。

有効出版か否かが問題になるのはふつう両方の解釈が成り立つような微妙な場合である。さきに発表された見解で取り上げられた出版物にしても、印刷はされていて、まがりなりにも金銭的に入手する方法はあったようである。問題は頒布の状態にあるが、出版物はどの範囲に頒布されれば有効となるかという線を明確にひくことは難しい。また、特定の人がある出版物を無効とする見解を表明しても、それはあくまでその人の見解にすぎないのであって、それだけで問題の出版物を無効とする根拠は命名法には示されていない。したがってそのような「見解」を、今回のような形で公表すること自体が無意味であったと思う。

さらに、学名の発表の有効性を過度に形式的な問題にしはじめると、研究結果の自由な発表の規制につながるようなことがおこってきほしないか、との危惧があるように思う。なぜならば、命名は分類学的研究の結論の一つであり、分類学において学問研究と命名を切りはなすことの難しい場合が多いからである。自らの研究結果をどのような形で発表するかは研究者の良心の問題である。研究結果が人目に立ちにくい出版物に発表された場合には、それが引用されなくても、それは見落した側のせいではなくて発表した側のせいであると判断されるだろう。

とは言っても、学名は少しでも多くの人の目につき易いように発表されなければならないのは当然である。ただ、それを強く主張するあまり、研究結果の発表にとまどいを生じさせるようなことがおこるとすれば、角を矯めて牛を殺したことになると思う。

それよりも、学名とはどのようなものか、それはどのようにして発表するのかを徹底徹底させることが何よりも先決である。命名法は現在、日本では簡単に見ることができるとは思えない。命名法の邦訳出版こそ急務であると思う。さらにまた、学名の出版に不適当な出版物の名をあげるよりも“適切”な出版物の門戸を広く開放することがはるかに大切であると思う。（*大阪大学教養部。 **京都大学教養部。 ***富山大学教養部）